

「もっとウキを知りたい～基本を覚えて使い分けよう～ウキ戦術～」

「もっとウキを知りたい！」もそろそろ終わりをむかえつつある。

これまでの解説をまとめ、ウキの素材、ウキの形状、構成などについて、体系的なまとめを「尽心作」の製作者である北村滋朗氏に紹介してもらおう。

第15回 まとめ

はじめに

これまで14回にわたって、ヘラウキの製作者側から提唱するウキの使い方、ヘラウキにまつわるこれまで定説となってきたことに対して検証を行ってきた。

今回はこれまでのまとめとして、ウキの素材、ウキの形状、構成などについて、体系的なまとめを行いたい。

素材選択とバランス

(1) バランス

タナを凝縮する→トップ長は短め、足の長さは短く

タナを広くさぐる。→トップ長は長め、トップの長さでバランスをとるため、足の長さは長く

(2) 素材選択1

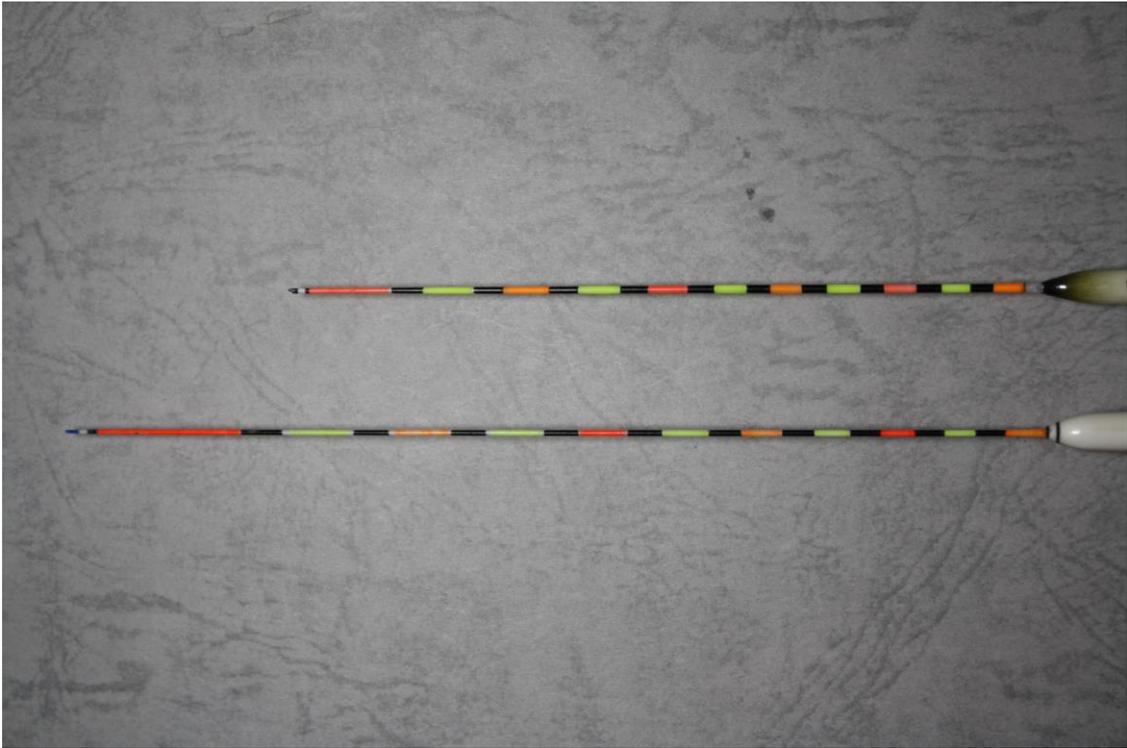
タナを凝縮する→パイプ系が主となる。

タナを広くさぐる→ムク系の長め

(3) 素材選択2

底釣りで、ウキの戻りを良くしたい→比重の軽い竹足で、浮力を増加

スムーズななじみ込みにしたい→比重の重いカーボン足で、安定性を確保



カヤと羽根の違いについて

誤解を生みそうなので、最初に結論を申し上げておきたい。

ヘラウキのボディの素材として、羽根とカヤに優劣はないと考えている。

羽根ウキとカヤウキの値段を決定する要因のひとつである手間暇が、羽根とカヤでは変わらないのに、値段の差があるのは不思議であるとも思っている。

単なるイメージではなく、釣況に合わせたボディ素材の選択こそが重要である。

羽根を凌駕する比重の軽いカヤ素材も存在するが、羽根とカヤでは比重が異なることから、オモリ負荷量1.0gを実現するためには、一般論としてカヤの場合は、羽根よりもボディの体積を増加する必要がある。



カヤと羽根の使い分けの具体例をあげてみると、同一作者が、仮にオモリ負荷量1.0gのウキをボディ素材以外は同じ仕様で製作したとする。

一般論として、カヤは比重が羽根よりも重いことから、ボディ径を羽根と比べて太くするか、ボディ長を羽根と比べて長くする必要がある。

体積が増加すると当然、ウキにかかる様々抵抗が、羽根よりもカヤのほうがかかってしまう。

従って、へらが、同じ力でウキを動かしても、抵抗が異なることから、当然違う動きをする。

ベテラン諸氏が口にする「厳寒期は、細い1本取りの羽根ウキが小さなサワリを表現する。」「最盛期、ウキががちゃがちゃになるときは、余計な動きを消してくれるカヤが良い。」という根拠は、比重の違いによるへらウキが受ける水の抵抗にあるのではないだろうか。

グラスソリッド足について

最近、へらウキの足素材がカーボンと竹に集約され、グラスソリッド素材の足を最近見かけなくなってきたと感じている。

また、カーボン製の足は、昔は1.0mmか1.2mmが多かったが、最近では0.8mmか1.0mmが主流となってきた。中には0.6mmのものも見かける。

グラスソリッドの比重は約1.9、カーボンで約1.4（実測値）であるが、カーボンのほうが強度がある。

なぜ足素材としてカーボンを選択するのか、それは、足を長くしても強度を確保できるからではないかと考えている。

また、風流れ等による水の抵抗を考えると、より細いほうが望ましい。

細さと強度のバランス、ボディと足の接合部分の仕上がりでウキ作者の方々は、足の細さを選択されているのではないだろうか。

グラスソリッドは、カーボンと同程度の強度を確保するには、やはり太くするしかない。

また、比重はグラスソリッドの方が重いため、ボディの浮力をスポイルする。

このあたりが、最近グラスソリッドの足が姿を消している理由ではないだろうか。

竹足について

竹足を使用するメリットは、以下の3点と考えている。

(1) 竹（編み棒）の比重（1.01）で、カーボンの比重（1.4）よりも軽い。軽いので、ボディの浮力を損なわない。

「尽心作 匠」では、①ノーマルの底釣りのようにウキの戻りを重視する場合、②比重の重いグラスソリッドをトップに使用した場合には、竹足を使っている。

(2) 竹足とボディの接合部分の直径は、竹足が太いことから、カーボン足よりも、太く仕上げる必要がある。これにより、体積が増し、ボディの浮力が増加する。

(3) 見た目の美しさ、主観的ではあるが、へら鮎釣りには和のテイストが多分にあり、自然素材の竹は、へらウキにマッチする。

この軽さと美しさという点を勘案し、かつ素材が選別された物として、私は編み棒を使用している。



ウキ製作者がどのように考えて、素材の選定、長さ、径を決めているのか、あくまで私個人を基準としたウキの製作であって、釣り人が自分のベストのウキを求めて、自作されるのが最も有効な方法ではないかと思う。

釣り人×釣法=∞（無限大）のバリエーションが考えられる。



ウキの自重について

「尽心作 匠」が、接着剤をほとんど使わず、塗りを薄く軽く仕上げるのは、ウキをできるだけ軽く仕上げたいからである。

従って、同じオモリ負荷量を得ようとすれば、ウキの径を細くして、ウキを軽く仕上げるほうが、水の抵抗を受けず、感度のよいウキができると考えている。

しかしながら、感度がよいヘラウキとヘラ師が求める「明確なツンを表現するウキ」は異なると考えている。

ヘラ師が求める「明確なツンを表現するウキ」は、余計なサワリやジャミアタリといった雑音を一定消し、明確なアタリのみを表現するウキではないだろうか。

ヘラ師が求める「明確なツンを表現するウキ」は、ボディの素材や形状、トップの材質、径を組み合わせることにより、意図的に製作することは可能である。

しかしながら、「厳寒期向けの僅かなサワリを表現し、かつ一定のオモリ負荷量をもつヘラウキ」は、抵抗が少ない径の細いウキで、かつ軽く仕上げたウキでない限り不可能である。

つまり、余計なアタリやサワリを消すことは、意図的に製作することが可能であるが、一定のオモリ負荷量をもちながら、わずかなサワリ表現するウキを製作するには技術が必要

である。

ウキの番手変更について

へらブナの密度や活性、風流れを考慮し、ウキの番手（サイズ、オモリ負荷量の意味）を選択することはとても重要であり、エサのタッチやハリスの長さを変更する前にウキの番手を変更してみることは、価値ある一手である。

以下は、私が体験した事象の紹介である。

（1）和歌山県橋本市「へら鮒釣り大学」の実釣講習において、サンプルとして Type-C の 6 番を受講生の方に使用いただいていた。

チョーチン釣りで、当初調子よく絞られていたのだが、その後へら鮒が寄りすぎ、ウキが入らなくなってきた。

その方は、小分けしたエサにダンゴの底釣り夏をからませ、エサの重さでウキを入れようとされたが、カラツンの嵐となってしまった。

そこで、エサを基エサに戻し、Type-C の 6 番から 7 番にウキの番手を上げたところ、またペースが戻ってきた。

へら鮒がわいてエサが入りにくい時、エサの比重を増したり、ハリスを短くしたりといった以外にウキの番手を上げてみるのも、ひとつの対応策である。

（2）これは自身の体験から、真冬にバランスのバラグルの底釣りで、風が強く振り込みもままならない状況にあった。当然、アタリは単発で、風でウキはしもり、流される。通常であれば、アタリ欲しさにウキをサイズダウンするのであるが、オモリ負荷量が 1.5 倍以上のウキに交換してみた。すると、振り込みやすくなり、かつシモリも少なくなって、かえってアタリが増えたという経験がある。

（3）今度は逆にウキのサイズダウンに関して、トロ巻きセット釣りで、アタリが散発な状況、トロ巻きセット釣りはハリス寸をほぼ固定しているため、ウキを 2 ランクサイズダウンし、ゆっくり落下するよう変更してみた。アタリっきりではないものの、アタリの数はかなり増えたという経験がある。

このように、エサの比重、ハリの大きさ、ハリスの長さ以外に、落下速度のトータルバランスの要であるウキを変えてみるというのは、釣況を打開する一手のひとつである。

同一作者によるウキ使用の勧め

本誌 2004 年 10 月号にて、中澤 岳氏が「トータルバランスはウキが決め手」という記事を書かれている。非常に興味深い記事で、今も何度も読み返している。その中で、「ウキはトータルバランスの支点」、「眼鏡に似ているウキの選び方」という点を指摘されている。

「ウキはトータルバランスの支点」というのは、「ウキが仕掛けにおけるバランスの支点になっていること」、「眼鏡に似ているウキの選び方」では、「計測基準となるウキを変えては正確な判断ができないのは当然」、「釣り方別に『専用ウキ』があるのは、眼鏡でいう『度

数』を指している訳だが、製品によって考え方に大きな差がある。安定した『視界』を維持していることは総重量制において絶対有利となる。」と述べられている。

ウキ製作者は自分の好みや考え方、回りの方々のアドバイス、プロの方はアドバイザーの方々の意見を取り入れ、釣り方別に『専用ウキ』を製作されている。しかしながら、「ウキはウキ製作者の技法や技量によって大きく異なる」ものとなる。また、ヘラウキは、羽根やカヤという天然素材で作られていることもあり、統一規格というものは存在しない。例えオモリ負荷量が同じであったとしても、異なる作者によって製作されたウキは、当然の異なる情報を発信する。

具体例で言えば、見た目よりオモリを背負うAという作者のウキで釣っていて、仕掛けトラブルにより、見た目よりオモリを背負わないBという作者のウキに交換したとした場合、ウキの大きさは同じでも、トータルバランスの支点は全く異なってしまう、ハリスの長さ、エサの比重等、全て変更しなければならないという状況に陥ってしまう。

こういった意味からも、自分がよいとおもったウキ製作者のウキを徹底して揃えるほうが、統一規格のない「ヘラウキ」においては、有利になると考える。

もちろん、自分にあつたウキを自作するのが、一番であることは言うまでもない。

今回は、最終回として、ウキのメンテナンスと良いウキとはいう定義について、考察してみたい。